

2022年5月10日

2022年3月期（2021年度）連結決算 電話会議 内容説明スクリプト

I. 全般概況

本日発表いたしました当社2022年3月期決算の概要についてご説明します。決算短信の表紙サマリーをご覧ください。

1. 2022年3月期 連結決算 業績概要

1) 当期の連結経営成績

① 売上高 1兆2,591億円、前期比3,330億円の増収
(売上総利益 2,578億円、前期比1,069億円の増益)

② 税引前利益 3,574億円、前期比2,340億円の増益

③ 当期利益 2,985億円、前期比1,998億円の増益

④ 親会社の所有者に帰属する当期利益 2,810億円、前期比1,864億円の増益

と、前期に対して増収・増益となり、売上高・利益ともに過去最高の数値となりました。

2) 当期連結決算の概況

当期連結決算の概況をご説明いたします。決算短信添付資料の2ページをご覧ください。

《金属価格、為替相場》

銅価格は、前期から当期首まで上昇が継続し、その後は新型コロナウイルス感染症の拡大の影響を受けながらも底堅い需要に支えられ、高水準な価格帯で推移しました。ニッケル価格は、世界経済の回復傾向を受け総じて上昇基調で推移しました。金価格は、期中は概ね一定水準で推移し、期末にかけて上昇基調に転じました。また、ロシアによるウクライナ侵攻後は非鉄金属価格が急騰する局面がありました。この結果、当期の銅及びニッケル価格はいずれも前期を上回り、金価格は前期とほぼ同水準となりました。

為替相場につきましては、米国における量的金融緩和の縮小や急速に進むインフレーションを抑制するためのゼロ金利政策の解除などの金融政策の転換に伴い、当期末にかけて円安ドル高傾向がより顕著となりました。これにより、当期の平均為替レートは前期に比べ円安となりました。

《売上高、損益》

当期の連結売上高は、銅及びニッケル価格が前期を上回ったこと、並びに旺盛な需要に支えられている車載用電池向け部材や粉体材料の増販などにより、前期に比べ3,330億円増加し、1兆2,591億円となりました。

連結税引前利益は、増収及び持分法による投資損益の好転、並びにシエラゴルダ銅鉱山に係る全持分の譲渡などにより、前期に比べ2,340億円増加し、3,574億円となりました。

親会社の所有者に帰属する当期利益は、連結税引前当期利益が増加したことなどにより、前期に比べ1,864億円増加し、2,810億円となりました。

3) トピックス

当期決算におけるトピックスについてご説明します。生産量については、決算補足説明資料の 7 ページをご参照ください。

① シエラゴルダ銅鉱山に係る全権益保有持分譲渡

全社的な資産ポートフォリオ見直しに伴い、シエラゴルダ銅鉱山に係る全権益保有持分を豪州の South32 Limited に同社子会社を通じて譲渡することとし、2022 年 2 月 22 日（現地チリ時間）付で譲渡を完了しました。譲渡に伴う売却益 744 億円が、当期の資源セグメント利益に計上されております。

② 海外銅鉱山

《モレンシー》

新型コロナウイルスの感染症拡大の影響を踏まえて一部のミル（鉱石粉碎装置）の操業度低下策を実施したことなどから、当期の生産量は前期を下回りました。同感染症拡大の影響縮小とともに 4 月から採掘量のランプアップを行い、加えて、2022 年に再開予定であった選鉱場を 7 月に処理能力 50% で稼働させています。例年よりも勢力が強く長期化したモンスーンの影響で、7 月から 9 月にかけてランプアップが一時期低調になりましたが、10 月以降は徐々に採掘量が回復し、年間の生産量は 397 千トンとなりました。

《セロ・ベルデ》

新型コロナウイルスの感染症拡大による影響を踏まえた年間計画に基づき、順調に操業を継続しました。品位の低下傾向を処理量でカバーする操業を行い、当期の生産量は 402 千トンと、同感染症拡大への対応で一時的に保安操業措置を実施した前期を上回りました。

③ タガニート HPAL

上期のボイラー設備トラブル、および 12 月の台風 22 号による停電などにより、当期の生産量は 24.8 千トンと、前期を下回りました。

④ CBNC（コーラルベイ）

新型コロナウイルス感染症の影響で 9 月に一時的に操業度を低下させたこと、および一部資材の不足などにより、当期の生産量は 18.1 千トンと、前期を下回りました。

⑤ 材料事業

電池材料において一時的に需要が低迷した前期に比べ脱炭素化を背景に需要が増加したほか、粉体材料において好調な需要が継続したことなどにより、材料事業セグメントの当期の売上高は、前期と比べて 665 億円増収の 2,780 億円となりました。セグメント利益は、前期に対して 171 億円増益の 276 億円となりました。

2. 次期（2023 年 3 月期）連結業績予想

決算短信の表紙サマリー下段、決算短信添付資料の 5～6 ページ、および決算補足説明資料の 1 ページ下段をご覧ください。

1) 売上高および損益

次期の通期連結業績予想

- ①売上高 1兆3,310億円、当期比719億円の増収
(売上総利益 2,220億円、当期比▲358億円の減益)
- ②税引前利益 1,940億円、当期比▲1,634億円の減益
- ③親会社の所有者に帰属する当期利益 1,370億円、当期比▲1,440億円の減益

業績予想の前提となる金属価格および為替は、決算短信添付資料の5ページならびに決算補足説明資料の1ページ下段に記載のとおりです。

金属価格は、長期的な需要拡大を見込んだ資金の市場への流入に加えて、ロシアによるウクライナ侵攻の影響によるサプライチェーンの分断や供給制約への不安から高水準で推移しておりますが、今後、急落するリスクも想定されます。次期の価格については銅9,000\$/t、ニッケル9.50\$/lbと予想しております。

次期の税引前利益は1,940億円と、当期に対して▲1,634億円の減益を予想していますが、シエラゴルダ売却益(当期の特殊要因)▲744億円、相場要因▲111億円、コスト差▲155億円、材料事業▲176億円、その他の為替差損益▲111億円などが減益の主な要因です。

2) トピックス

次期の通期連結業績予想におけるトピックスをご説明します。生産量については、決算補足説明資料の7ページをご参照ください。

①菱刈鉱山

21中計で発表したとおり、2022年度からメインライフ延長に向けたサステイナブルな生産体制へ移行するため、年間の金生産量は4.4トン(2021年度実績は6.1トン)で計画しています。

②海外銅鉱山

《モレンシー》

2021年7月に処理能力50%で再稼働させた選鉱場は、2022年3月に100%稼働が完了しており、次期の生産量は当期比+40千トンの437千トンを見込んでいます。

《セロ・ベルデ》

次期は、処理量増加および給鉱品位の上昇により、当期比+49千トンの451千トンの生産を見込んでいます。

《カンデラリア》

次期予想の年間生産量は133千トンと、当期に対して増産となる見込みです。

③タガニートHPAL

次期の年間生産量見込みは32.2千トンと、設備トラブルや台風による停電トラブルに見舞われた当期に対しては増産を見込んでおります。

3. 配当

配当についてご説明いたします。

決算短信の表紙サマリー、および本日公表しました「2022年3月期（第97期）配当予想の修正に関するお知らせ」をご覧ください。

本日付けで開示した通期連結業績を踏まえ、期末の配当予想を前回配当予想に対し43円増配し、1株当たり188円に修正いたしました。これにより、一株当たりの年間配当金は、過去最高の301円となる予定です。

なお、2022年3月期の通期連結業績には、シエラゴルダ権益譲渡に伴う売却益等を含んでいますが、この売却益には、2019年度の利益剰余金期首残高で調整したSierra Gorda S.C.M.への貸付金等に対する貸倒引当金の累積的影響額（改訂IAS第28号「関連会社及び共同支配企業に対する投資」）の戻入益に相当する金額が含まれております。この戻入益相当額は、貸倒引当金を認識した際に、2019年度の損失計上ではなく利益剰余金を減らす期首調整として計上しており、損益勘定（PL）を通していないことから、今回の配当の修正予想の算定には含めないこととし、これを除いたベースで、当社の株主還元方針である連結配当性向35%以上としております。

また、2023年3月期の配当予想については、連結業績予想を踏まえ、中間は1株当たり87円、期末は1株当たり88円、年間では1株当たり175円としました（配当性向35.1%）。2022年3月期の年間配当予想（1株あたり301円）からは減配となるものの、過去2番目の高水準の配当予想となります。

II. 売上総利益、セグメント利益の内訳他の詳細

ここからは、決算補足説明資料について、ポイントとなる部分のみご説明いたします。

1. 1ページ 決算・予想比較

1) 2021年度決算 vs 2020年度第決算

1ページ目上段の表が当期連結決算と前期実績および前回2月公表業績予想との比較となります。表の脚注の記載【前年同期比較①ー②】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益2,340億円増益の要因のうち、相場要因好転1,674億円とシエラゴルダ権益譲渡に伴う売却益744億円以外の主な項目をご説明します。数量差については、主に前期比減販のモレンシー、電気ニッケル、THPALなどで悪化し、トータル44億円の悪化となりました。コスト差については、シエラゴルダが第2四半期までの実績で大幅な好転となった一方で、前期比減産のTHPAL、CBNC、モレンシー、電気銅のほか、品位低下などにより、セロ・ベルデなどで悪化し、トータル202億円の悪化となりました。材料事業については、電池材料、粉体材料などで前期比増販・増収となったことや金属価格上昇による建値差の好転などもあり、171億円の増益となりました。QB2建設中断コスト+62億円およびシエラゴルダ貸引影響▲86億円については、それぞれ前期に計上した当該費用および貸倒引当金戻入益が今期無いことによる一過性要因です。その他の▲76億円には、未実現利益や、パラジウム影響、PTVI関連の前期損益の剥落など様々な要因が含まれています。

2) 2021 年度決算 vs 2021 年度通期業績予想 (2 月予想)
続いて、①-③の 2 月公表業績予想との比較をご覧ください。

税引前利益 434 億円増益の要因のうち、相場要因好転 231 億円以外の主な項目をご説明します。材料事業については、電池材料事業などで 2 月予想比増収となったことや金属価格上昇による建値差の好転などもあり、46 億円の増益となりました。その他の+99 億円には、相場要因や材料に含まれない持分法会社の損益増減や、副産品・パラジウム・亜鉛等の好転影響など様々な要因が含まれています。

3) 2022 年度予想 vs 2021 年度決算

続いて、次期業績予想と当期決算との比較について、1 ページ目下段の表と脚注の記載の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益 1,634 億円減益の要因のうち、相場要因悪化 111 億円と、シエラゴルドの売却益 744 億円および当期持分法損益 82 億円がなくなる以外以外の主な項目をご説明します。数量差については、菱刈鉱山で減産・減販に伴う悪化を見込む一方で、モレンシー、セロ・ベルデ、THPAL、CBNC、電気ニッケルなどで増販に伴う好転を見込むことにより、トータル 135 億円の好転と予想しています。その他の為替差損益は大きくプラスとなった当期から減少し、年度比較では 111 億円の悪化と予想しています。コスト差については、菱刈やモレンシーなどでコスト単価差の悪化を見込む他、各拠点でエネルギーコストの上昇等に伴うコスト単価差の悪化を見込むことなどによりトータル 155 億円の悪化と予想しています。材料事業は電池材料や粉体材料で建値差やコスト単価差の悪化を見込むこと等により 176 億円の減益と予想しています。受取利息についてはシエラゴルドの権益譲渡などにより 64 億円の悪化・減少を見込みます。その他の▲326 億円には、相場要因や材料に含まれない持分法会社の損益増減や硫酸・亜鉛等の悪化影響など様々な要因が含まれています。

2. 3 ページ セグメント別対前年実績比較 (売上総利益増減)

3 ページ セグメント別の対前年実績比較をご覧ください。

資源セグメントの売上総利益は 914 億円と 327 億円の増益となりました。ページ中央の増減説明に記載のとおり、海外銅鉱山・主にモレンシーの銅価格上昇に伴う価格差好転が最大の要因です。

製錬セグメントの売上総利益は 1,247 億円と 601 億円の増益となりました。下段の増減説明のとおり、銅系で 267 億円、ニッケル系で 362 億円の好転となりました。主な増減理由として、コスト単価差は電気銅、THPAL、CBNC などの前年度比減産に伴い銅系・ニッケル系ともに悪化となりましたが、ニッケル系の価格条件差がニッケル・コバルト、特にニッケルの価格上昇により大きく好転した他、銅系の在庫評価でも大きく好転となりました。その他についても、銅系は硫酸等の好転影響等、ニッケル系は為替の影響等により、それぞれ好転しました。

3. 4 ページ セグメント別対前年実績比較 (材料事業の製品群別売上高)

4 ページ上段、材料事業の製品群別売上高のうち、電池材料の売上高については、前期からの需要回復・増加を背景として 403 億円増収の 1,359 億円となりました。粉体材料については、好調な需要を背景として 140 億円増収の 512 億円となりました。

4. 4 ページ セグメント別対前年実績比較（持分法投資損益）

4 ページ中央、当期の持分法投資損益については、前期比 488 億円増益の 575 億円となりました。ゼロ・ベルデは、前期比増産・増販となったことや銅価格上昇により 214 億円増益の 266 億円となりました。カンデラリア・オホスについても、銅価格上昇等により 85 億円増益の 104 億円となりました。シエラゴルダは、第 3 四半期から持分法の適用を中止したため当期損益は第 2 四半期までの実績となりますが、前期比 117 億円増益の 82 億円となりました。

5. 5 ページ セグメント別 2022 年度予想比較 2022 年度予想 vs 2021 年度決算

5 ページをご覧ください。次期業績予想と当期決算とのセグメント別比較です。業績予想の数値は 10 億円単位の丸め数字で記載しています。

資源セグメントの売上総利益は 840 億円と 74 億円の減益と予想しています。ページ中央の増減説明に記載のとおり、海外銅鉱山・主にモレンシーで増販に伴う数量差好転を見込む一方で、菱刈鉱山の減販・減産に伴う数量差・コスト単価差の悪化と、モレンシーのコスト単価差の悪化を見込むことが主な要因です。

製錬セグメントの売上総利益は 1,080 億円と 167 億円の減益と予想しています。下段の増減説明のとおり、銅系は 256 億円の悪化、ニッケル系は 92 億円の好転と予想しています。銅系では、在庫評価の悪化を見込むほか、その他についても硫酸等の悪化影響等を見込むことにより減益の予想となっています。ニッケル系では、価格条件差で主に 2021 年度末に急騰したニッケルの価格について、下落することを前提としたことによる悪化を見込む一方で、電気ニッケル、THPAL、CBNC などの増販・増産に伴う数量差、コスト単価差の好転を見込むことにより増益の予想となっています。

6. 6 ページ セグメント別 2022 年度予想比較（材料事業の製品群別売上高）

6 ページ上段、材料事業の製品群別売上高について、材料事業全体の次期売上高は当期実績に対して 420 億円増収の 3,200 億円と予想しています。そのうち、電池材料については、411 億円増収の 1,770 億円、粉体材料については、22 億円減収の 490 億円と予想しています。

7. 6 ページ セグメント別 2022 年度予想比較（持分法投資損益）

6 ページ中央の持分法投資損益については、5 億円刻みの丸め数字で記載しています。

持分法投資損益全体としては、当期実績に対して 185 億円減益の 390 億円と予想しています。

減益の主要因は銅系で、120 億円減益の 390 億円と予想していますが、この大半はシエラゴルダの当期損益 82 億円が剥落することによるものです。ゼロ・ベルデおよびカンデラリア・オホスについては、増販による数量差好転等が価格差悪化等により相殺され、当期と同程度の損益となる予想です。

以上